

中間構文の意味と形式

－属性叙述と構文ネットワーク－

初谷 智子

1. はじめに

本稿では、英語の中間構文 (middle construction) の意味上の最大の特徴である「属性叙述」について、それが形式的に動機づけられたものであることを明らかにする。まず、この構文の形式的特徴について、先行研究に基づいて整理する。そのうえで、この構文の意味特徴として最も本質的なものが「属性叙述」であり、それ以外の様々な意味特徴は、「属性叙述」のための道具立てとして付随的に生じたり、「属性叙述」から派生する二次的な要素であることを示す。さらに、中間構文がプロトタイプカテゴリーをなすという観点から、中間構文の周辺の事例についてそれらがどのように動機づけられているのかを検討し、構文ネットワーク構築の可能性について提案する。

2. 中間構文の形式的・意味的特性

中間構文は、(1)に見られるように、動詞が他動詞の能動形でありながら、他動詞の意味上の目的語が主語として現れる構文であり、能動文と受動文の中間的性質を持つことから「中間構文」と呼ばれる。特に商品の広告・宣伝文や使用説明書などで頻繁に用いられる構文であり、これまで数多くの分析が行われてきた。

- (1) a. Small cars sell well.
b. This door opens easily.
c. Bureaucrats bribe easily. (Keyser & Roeper 1984)

英語の中間構文については、一般に、(2)に挙げたようなさまざまな形式的、意味的特徴が指摘されている (Keyser & Roeper (1984), Iwata (1999), Sakamoto (2001), Taylor & Yoshimoto (2006), 松瀬・今泉 (2001), 初谷

(2014) など)。

- (2) a. 通例、他動詞が能動形で現れる。
- b. 他動詞の意味上の目的語となる行為の対象が主語として現れる。
- c. 他動詞の意味上の主語（動作主）は表面に現れず、総称的に解釈された潜在的動作主（implicit agent）がその意味に含まれている。
- d. 基本的に単純現在時制をとる。
- e. 典型的には副詞句をとる。
- f. 特定の出来事ではなく、総称的な行為の可能性や主語の属性を描写する。

以下ではまず第3節で、中間構文の形式的特徴について、先行研究とともに初谷（2014）での主張を見る。その後第4節で、この構文の意味的特徴をもう一度整理しなおし、それぞれの特徴が形式的特性によってどのように動機づけられるかを検討する。さらに第5節では、非典型的とされる様々な中間構文について、それらがどのように構文のネットワークに位置づけられるかを示してゆく。

3. 中間構文の形式的特徴

3.1 初谷（2014）による「反使役化」分析

中間構文の形式的特徴としては、(2a, b) に述べたように、「受動態に類似した意味を持つのに動詞が能動態の形で現れるのはなぜか」、「他動詞の表す行為の対象を指示し、従って本来なら目的語の位置に現れるべき名詞句が、能動文の主語位置に現れるのはなぜか」という統語的側面がまず議論の対象となる。この点について、本多（2013）と拙著（2014）の分析を比較する。

本多（1997, 1999, 2002, 2005）は、生態心理学（Gibson 1966, 1979; 佐々木 1994）の立場から、中間構文を探索活動とアフォーダンスに動機づけられた構文であるとする。その上で、本多（2013: 256）では中間構文の成立プロセスとして、まず THEME を主語とする能格自動詞構文を措定し、そこに動作主が読み込まれるというプロセスを仮定している。つまり、能格動詞においては自動詞用法と他動詞用法で形態論上の overt な違いがないことから、THEME を主語とする能格自動詞構文において動作主を読み込んだときに、「THEME + 能格自動詞」が「PATIENT + 能格他動詞」として再解釈され、その結果、中

中間構文の意味と形式

中間構文が成立する、という主張である。このように、本多によれば、中間構文の発生・成立におけるもっとも重要な契機は「自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み」である、ということになる。話し手である動作主がある意図をもって行動したとき、自動詞が表す事態はその行為の結果状態もしくは行為の目標となり、それがうまくいったりいかなかったりするという経験を表現するのが中間構文である、という主旨である。

しかし、この主張にはいくつか問題がある。まず、先にある対象物を主語とする自動詞構文が存在し、そこに(ゼロ形とはいえ)動作主を読み込むと、主語名詞句が PATIENT として再解釈される、という点であるが、なぜそのようなことが可能であるのか、動機づけが明確でない。統語的観点から見ても、他動詞の PATIENT と解釈される対象が、動詞が受動化されることのないまま主語に収まることが認められると仮定するのであれば、なぜ受動化のプロセスを経なくてすむのかの説明が必要であろう。また、この主張は下で見る谷口(2009, 2014など)に示される、子どもの言語習得の順序とは逆であり、その点でも説得力に欠けると言わざるをえない。

一方、初谷(2014)では、中間構文の構造を、能格自動詞構文と同様に、影山(1996)が言うところの「反使役化」によって動機づけられるものと説明している。つまり中間構文の成立には他動詞構文の構造がまず基盤としてあり、そこから使役主と変化対象を(ある意味)同定する「反使役化」というプロセスによって自動詞構文構造が生じる、とする考え方である。そこでの議論で、筆者は、中間構文の反使役化を動機づけているのが、対象が持つ「性質」や「属性」であり、それらが動作主よりも述語動詞事態の成立に対してより大きな影響力を持つ(すなわち「責任がある」)と認識されることにより、動作主がある意味、捨象され、背景化された結果として、それらの名詞句が主語として選択されうるようになる、と主張した。

中間構文の基盤が自動詞事態ではなく他動詞事態であるという考え方は、谷口(2009, 2011, 2014, 2015)による子どもの発話における非対格(能格)自動詞用法の習得過程についての研究の中でも指摘されており、初谷(2014)の主張を間接的に支持するものといえる。以下でその内容を概観しておこう。

3.2 谷口(2009, 2011, 2014, 2015)の分析による裏付け

谷口は、子どもの発話を収集したデータベースである CHILDS からアメリカ英語・イギリス英語のコーパスを用い、子どもの発話における非対格自動詞用法の習得過程についての分析を行った。その中で、谷口(2009)は、子ども

における構文としての middle (中間構文) の成立について次のように述べている。

- (3) まず、他動的事態から Agent (こども自身) を切り離しモノを焦点化させる自動的事態の前段階として、こども自身の行為を対象 (モノ) が阻害する場合に対象を焦点化させるという middle の事態概念が生じ、そのような場合には他動詞と同じ形態の動詞によって「モノの焦点化」を標示し得ることを習得する。それによって、「行為が失敗し、かつその対象を焦点化するさいには、自らの行為を記号化する他動詞を自動詞として用いる」という過剰生成が生じる。そのような状態を経た後、完全に Agent の存在を分離させモノの移動や変化を自律的に捉える概念化が可能となり、非対格自動詞の使用が対応づけられる。また、受け身が 4 歳～5 歳で習得され (Tomasello 2003)、他動的事態をベースとしながらモノを焦点化させる新たな手段が得られる。以上のような過程を経て、最終的に残る限られたケースから大人の文法における middle の構文が立ち上がるのが 7 歳頃ではないかと推測される。 (谷口 2009: 317)

また、谷口 (2014) では、英語の *get* 受身の習得過程の分析を通じて、中間態の習得について次のように述べている。

- (4) こどもの *get-passive* の発話状況から、3～4 歳頃に *get-passive* が自動的事態のマーカースとして汎用されていると想定される。年齢が上がるにつれ非対格自動詞や *be-passive* の習得が進み、*get-passive* は適用範囲を狭めていく。*get-passive* は、形式的にも意味機能的にも、中間態から受動態への橋渡しとして *be-passive* に先行して習得されると位置づけることができる。 (谷口 2014: 206)

これらの習得についての研究から、中間態の使用は非対格自動詞文の習得に先立って生じ、その後、受動態などの習得を経て、特殊な構文としての中間構文の用法が確立すると考えられる。この点で、言語習得についての谷口の分析は、初谷 (2014) における、中間構文が他動詞構文を基盤として反使役化によって成立するという主張を裏付けるものといえる。

次に次節では、このような形式的前提に基づくことで、この構文の意味的特徴がどのように説明できるかを見ていきたい。

4. 中間構文の意味的特徴

4.1 吉村 (2012) による分析

(2) で見たように、中間構文については一般に、表面に現れない意味上の主語があること、主語名詞句の一般的属性を表すこと、総称的であること、行為の可能性や難易度を表すことなど、様々な意味的特徴が指摘されている。これらの点はそれぞれが中間構文を特徴づけるものとして理解されているが、吉村 (2012) は、言葉の形式と意味との関係を「動機づけ」の観点から問う最も本質的なものとして、中間構文について次の問いを行っている。

- (5) 能動文と受動文の両者の中間にある表現の「形」が、なぜ事物の「属性」に言及する力をもちうるのか？ (吉村 2012: 203)

中間構文において、この形式が「属性記述」という意味をなぜ持ちうるのか、ということが最も本質的な問いである、という点については全く賛成である。これについて吉村は、行為を行う能動側の論理が、行為の受け手となる受動側の論理に読み換えられたとき、「属性」が「発現」ないしは「創発」する、と述べている。例えば、典型的な中間構文においては、能動側の行為はコミュニティー構成員にとって公的に透明化されている。一方でその可能な行為に対応した内臓機能が対象に装備されていることが普通であるため、所与の行為を実現するために対象の内臓機能は「自動」的に稼働し、それにより「責任」を負うことになる。その結果、能動側の行為はあたかも対象から内発するがごとく「能動形自動詞」に捉えなおされ (= 転位)、その限りにおいて当該の行為が対象に「内在」した本質的な「属性」と解釈される、としている (吉村 2012: 215)。

4.2 吉村 (2015) による分析

一方で、吉村 (2015) では、次の (6) の例文を挙げ、(6a) を非能格動詞による「自然的属性」、(6b) を非対格動詞による「出来事属性」、(6c) を中間動詞による「発見的属性」と述べ、中間構文は「(発見的に) 属性の存在 (認知的捉え) を強制する構文である」(p.607) としており、(6b) を中間構文とはみなしていないようである。

- (6) a. Water *freezes* at 32°F. (水は華氏32度で凍る)

- b. This cheese *freezes* quickly. (このチーズは手早く冷凍できる)
- c. Don't throw this food away. It'll *freeze!* (この食品は捨てるな。冷凍できる！) (John Taylor, p.c.: 吉村 (2015: 607) より)

(6b) は通常、中間構文と分類されるべきものであろうし、また、(6c) のような中間構文にのみ「ある解釈を強制する」という機能を与えることも本当に必要であるかどうか疑わしい。初谷 (2014) では、中間構文の統語的成り立ちとして、対象を動作主と同定するというプロセスを想定しており、したがって中間構文は、動作主には関係なく対象の「性質」や「属性」によって (のみ) 述語動詞の事態が成立するという事態を表現する形式と考えているので、「属性叙述」という意味合いは自動的に得られると主張している。したがって、属性叙述という意味特徴は、構文的に強制しなくても構文の成り立ちから十分に説明できるものであるはずであり、また、後で見るように中間構文にも様々な周辺事例があり、中間構文の典型例 (この場合、これが典型例かどうかも疑わしいが) において何らかの意味の強制を想定することになると、周辺の事例においてもその「強制された意味」が保持されるかどうかを一つ一つ議論する必要が出てくるだろう。(吉村は (6b) の文についてはここでは議論していない。)

吉村は「発見的属性は「発見する行為」という「経験」から除外することはできない。」(p. 608) と述べる。これはまさしくその通りであると思われる。彼は、「発見」は自己が客体に対して何らかの「行為」を働きかけ、両者が相互作用することから生じる経験である、とする。ただし、「対象の客観的観察ではなく、主体の「行為」が客体を内的経験の産物として捉える手法は中間構文において顕著である。(中略) [対象] を客体として観察した報告文ではない。使い手が行為 (使用) するとき、それがどのように反応するかを通してその属性を描きだそうとするものである。」([] 内は筆者による加筆) (p. 609) という記述については、議論の余地があると思われる。続けて彼はこう述べている。「属性は、(中略) 使い手の行為と、客体の被行為との相互的行為の場で成立する。そのため中間構文の主語には客体からの反応をほのめかす動作主性 (agent) が認められ (中略) そうした客体の動作主性と人間の動作主性 (AGENT) とが心理的に混然となり融合したときの対象が中間構文の主語となって現れる。」

客体の動作主性と主体の動作主性が融合する、という考え方は、ある種の「主体化」のプロセスを想定したものであると思われるが、中間構文の基本的機能である「属性描写」というのは、客体的に提示されてこそその機能ではなからうか。

中間構文の意味と形式

広告文などで広く用いられるという実態が示すように、中間構文が「誰にとっても」その効果が得られることを主張するための構文という機能を果たすためには、客体の持つ属性をむしろ主体から切り離す方向に向かうべきだからである。谷口（2009）によれば、子どもは「行為が失敗し、かつその対象を焦点化するさいには、自らの行為を記号化する他動詞を自動詞として用いる」という過剰生成を経たのちに、大人の文法における middle の構文を習得するという。つまり、子どもはある行為の失敗を自己の責任から切り離すために、中間構文という手段に訴える、と解釈できる。したがって、話者の主体的「経験」は対象が持つ属性へと転化された際に捨象されたと考えるべきであり、それだからこそ、中間構文において（7）のように for 句による経験者の明示的付加が可能になるのだと考えられる。

(7) This onion slices easily *for me*, but not *for you*. (Stroik 1995)

ただ、確かに吉村（2015）の言うように、中間構文で述べられる属性は話者（主体）の経験を通して「発見された」ものであり、単なる観察による「自然的属性」とは区別されるべきであろう。つまり、中間構文が主張する対象の「属性」は、あくまで話者による経験の結果として導き出されたものである。ただ、それを中間構文という形に落としした時点で、話者は自己の主体的経験を、対象の属性に帰するべきものとして一般化することにより、その対象から誰でも共通の経験ができるという可能性を開放しているといえる。したがって、中間構文についてその特質として挙げられる「任意の動作主が読み込まれている」という主張や「行為可能性」を示すという意味特徴は、属性叙述という機能を構文から読み取るプロセスにおいて、聞き手（読み手）が元の主体である動作主の経験を自発的に追体験して得ることによる、副次的効果と考えるべきではないだろうか。

5. 多様な中間構文：構文のネットワーク

最後に、中間構文がプロトタイプカテゴリーをなすという観点から、この構文の周辺的事例のいくつかについて、それらがどのように構文ネットワーク上に位置づけられるかを見ていきたい。

影山（2012）では、文法的制約の適用という点での事象叙述文と属性叙述文の性質の違いについて、次の3点を挙げている。

- (8) A. 事象叙述文の統語論研究において想定されてきた一般的な規則や制約に違反するにもかかわらず、非文法的として排除されるどころか適格であると認められる場合がある。
- B. そのような規範から外れる例外的な表現は、事象ではなく属性を表す意味に変化している。
- C. さらに、そのような属性叙述文は、対応する事象叙述文と比して、結合価の減少や名詞句の総称化を含む他動性の低下を伴う。

(影山 2012: 13)

本論では中間構文の統語的特徴が「属性叙述」という意味特徴を動機づけていると考えているが、ここではその順序については議論せず、(8)の影山の指摘を、単に属性叙述表現の形式的特徴として捉えるものとする。

さて、中間構文は属性叙述文であり、他動詞の能動形を自動詞的に用いる、という統語的特徴は、まさしく上記(8A, B, C)に当てはまると解釈できる。そこで、本多(2013)に挙げられた非プロトタイプ的な中間構文のさまざまな事例についても、それらを動機づけるものが何か、検討してみたい。

- (9) a. This knife cuts cleanly.
b. The lakes continue to fish well.
- (10) a. The new jug doesn't pour custard properly.
b. That corner sells magazines well.
- (11) a. The door won't open.
b. The door opens automatically.
- (12) a. The chairs fold up.
b. Would you believe it! The car drives!.
- (13) a. Your plane is now boarding at Gate 20.
b. The house sold for a million dollars. (本多 2013: 255-256)

(9)はいわゆる「擬似中間構文」であり、主語名詞句の位置に動詞の目的語ではなく、道具や場所を表す付加詞が取り立てられているパターンである。しかし、これらも(9a)のcutや(9b)のfishを自動詞と解釈すれば(これらの解釈において目的語は必要ないと思われるため)、上の(8C)に照らしてみると、属性叙述文になる過程で1項述語がゼロ項になったものと解釈できる。つまり、典型的な中間構文の成立プロセスである「Agentの捨象」という力学が自

中間構文の意味と形式

動詞構文に働いた結果、同じ効果が生じたものといえるだろう。また、(10)については、(9)の自動詞表現からの拡張（もしくは(9)を他動詞と勘違いしたことによる過剰一般化）として、他動詞の目的語ではなく付加詞を取り立てることにより生じたものと考えればよいのではないだろうか。

(11)は(11b)が明確に非対格自動詞構文であるのに対し、(11a)が非対格自動詞構文か中間構文かが曖昧である、と指摘されているものであるが、これは拙著(2014)での説明に従えば、その成り立ちのプロセスが同じであるため、何らかの副詞句か文脈が与えられない限り、二通りの解釈ができるのはある意味当然といえ、むしろ中間構文と非対格自動詞構文の連続性を示す証拠といえるであろう。

(12)は通常伴うべき副詞句や助動詞が現れていないものであるが、それらの要素は主語名詞句の特徴づけという役割を担うためのものでしかなく、したがって、動詞の行為のみで主語名詞句について十分な特徴づけができる場合には、「属性叙述」という機能を果たす上でそれ以上必要ないものである（「折りたたむことなど想像していなかった椅子が折りたためた」、「動くはずのなかった車が動く」等）。

さらに(13)については、これらは時制が単純現在時制でないために、「総称性」という意味特徴が失われて、単なる単体の出来事の記述にシフトしていると言わざるを得ないが、それでもこの構文を用いることにより、主語名詞句の属性やその属性が可能たらしめる行為についての記述であるという機能はあくまでも保持されているといえるだろう。

6. おわりに

以上、本稿では、英語の中間構文(middle construction)の形式的動機づけとその意味的特徴について、先行研究を踏まえながら分析を行った。形式的側面では、この構文が、動作主(発話者)による行為を対象の属性に置き換えるという事態認知プロセスをそのまま構造に反映させたものであること、また意味的側面としては、この構文の意味特徴として最も本質的なものが「属性叙述」であり、それ以外の様々な要素は「属性叙述」という意味を生み出す過程に付随して生じるものとして説明できるのではないかということを提案した。また、中間構文のさまざまな周辺の事例について、プロトタイプ構文からどのように動機づけられるかを示した。

中間構文のネットワークがどのように構造化できるかについては、今後さら

に詳しく検討し、非対格自動詞構文やコピュラ文などの連続性についても明らかにしていきたいと考えている。

References

- Ackema, Peter and Maaïke Schoorlemmer (1994) The middle construction and syntax-semantics interface. *Lingua* 93: 59-90.
- Ackema, Peter and Maaïke Schoorlemmer (1995) Middles and nonmovement. *Linguistic Inquiry* 26: 173-197.
- Fagan, Sarah (1988) The English middle. *Linguistic Inquiry* 19: 181-203.
- Fagan, Sarah (1992) *The syntax and semantics of middle constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fellbaum, Christiane (1985) Adverbs in agentless actives and passives. *CLS* 21: 21-31.
- Fellbaum, Christiane (1986) *On the middle construction in English*. Indiana University Linguistics Club.
- Fellbaum, Christiane and Anne Zribi-Hertz (1989) *The middle construction in French and English: A comparative study of its syntax and semantics*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Gibson, James J. (1966) *The senses considered as perceptual systems*. Boston: Houghton Mifflin.
- Gibson, James J. (1979) *The ecological approach to visual perception*. Boston: Houghton Mifflin.
- Greenspon, Michael (1996) *A closer look at the middle construction*. Ph.D. dissertation, Yale University.
- Guerssel, Mohamed, Ken Hale, Mary Laughren, Beth Levin and Josie W. Eagle (1985) A cross-linguistic study of transitivity alternations. *Papers from the parasession on causatives and agentivity, CLS 21, Part 2*: 48-63.
- Hale, Ken and Samuel J. Keyser (1987) A view from the middle. *Lexicon Project Working Papers* 10: 1-64. Center for Cognitive Science, MIT.
- 初谷智子 (2014) 「英語中間構文の意味特性—「非明示的動作主」は何か—」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第27号, 姫路獨協大学外国語学部, 33-48.
- 初谷智子 (2015) 「英語中間構文における属性描写と行為可能性」『ことばの研究』第6号, 姫路獨協大学外国語学部, 1-12.

中間構文の意味と形式

- 平井剛 (2006) 「英語中間構文の意味構造」山梨正明他 (編) 『認知言語学論考』 No.5, ひつじ書房, 79-118
- 本多啓 (1997) 「英語の主体移動表現, 中間構文, 知覚動詞について: 生態心理学の観点から」『駿河台大学論叢』 15: 95-116.
- 本多啓 (1999) 「再び英語の中間構文について」『駿河台大学論叢』 18: 137-156.
- 本多啓 (2002) 「英語中間構文とその周辺: 生態心理学の観点から」西村義樹 (編) 『認知言語学 I: 事象構造』東京大学出版会, 11-36.
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論: 生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会.
- 本多啓 (2013) 「中間構文の英日対照とその理論的な意義」日本英語学会第31回大会 *Conference Handbook* 31: 255-260.
- Iwata, Seizi (1999) On the status of an implicit argument in middles. *Journal of Linguistics* 35: 527-553.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論: 言語と認知の接点』, くろしお出版.
- 影山太郎 (2001) 「自動詞と他動詞の交替」影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店, 12-39.
- 影山太郎 (2012) 「属性叙述の文法的意義」影山太郎 (編) 『属性叙述の世界』くろしお出版, 3-35.
- Keyser, Samuel and Thomas Roeper (1984) On the middle and ergative constructions in English. *Linguistic Inquiry* 15: 381-416.
- Lakoff, George (1970) *Irregularity in syntax*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Langacker, Ronald W. (1987, 1991) *Foundations of cognitive grammar*. Vols. I, II. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1990a) *Concept, image, and symbol: The cognitive basis of grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (1990b) Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.
- Langacker, Ronald W. (1995) Raising and transparency. *Language* 71: 1-62.
- Langacker, Ronald W. (1998) On subjectification and grammaticization. In *Discourse and cognition: Bridging the gap*. ed. Jean-Pierre Koenig, 71-89. Stanford: CSLI Publications.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー』松柏社.

- 松瀬育子・今泉志奈子 (2001) 「中間構文」影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店, 184-211.
- 三木望 (2001) 「難易構文」影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店, 212-239.
- 南佑亮 (2007) 「典型的な tough 構文の多義性と主体性について」河上誓作・谷口一美 (編) 『阪大英文学会叢書 4 ことばと視点』英宝社, 91-103.
- 南佑亮 (2013) 「事象と属性の接点—難易度を表す形容詞の多義性を中心に—」日本認知言語学会第14回大会 *Conference Handbook*: 83-86.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and cognition: The acquisition of argument structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Sakamoto, Maki (2000) *A cognitive network of the middle and related constructions in English and German*. Doctoral dissertation. Tokyo: Department of Language and Information Sciences, University of Tokyo.
- Sakamoto, Maki (2001) The Middle and Related Constructions in English. *English Linguistics* 18(1): 86-110.
- 佐々木正人 (1994) 『アフォーダンス: 新しい認知の理論』岩波書店.
- Stroik, Thomas (1992) Middles and movement. *Linguistic Inquiry* 23-1.
- Stroik, Thomas (1995) On middle formation: A reply to Zribi-Hertz. *Linguistic Inquiry* 26: 165-171.
- Taniguchi, Kazumi (1994) A cognitive approach to the English middle construction. *English Linguistics* 11: 173-196.
- 谷口一美 (2009) 「中間構文の習得からみた構文文法的再考」『日本認知言語学会論文集』9, 309-319.
- 谷口一美 (2011) 「英語における自他交替の習得—open, move を例に一」大庭幸男・岡田禎之 (編著) 『意味と形式のはざま』英宝社, 5-16.
- 谷口一美 (2014) 「英語の中間態再考: 事態概念と言語習得の観点から」『日本英語学会第31回大会 (福岡大学)・第6回国際春季フォーラム (東京大学本郷キャンパス) 研究発表論文集』, 200-206.
- 谷口一美 (2015) 「動詞の用法の獲得とインプットとの相関に関する観察」『日本認知言語学会論文集』15, 656-661.
- Taylor, John R. and Kimihiro Yoshimura (2006) The Middle Construction as a Prototype Category. 『日本認知言語学会論文集』6, 362-370.
- 吉村公宏 (2012) 「中間構文の意味論的本質」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座 2 構文と意味』ひつじ書房, 201-220.

中間構文の意味と形式

吉村公宏（2015）「捉え方の普遍性と多様性」『日本認知言語学会論文集』15,
600-614.

Property Predication in the English Middle Construction and its Construction Network

Tomoko HATSUTANI

This paper discusses the correlation between the structural motivation and the semantic properties of the English middle construction. It first argues that the structure of this construction is motivated by the agent's (or the speaker's) intentional manipulation which attributes the implementation (or impossibility) of the process depicted with the verb phrase to the theme object rather than the agent, the former thus taken up as the subject NP instead of the latter. Based on this assumption, it is concluded that this cognitive process of replacing the agent with the theme object automatically gives rise to the most notable semantic function of this construction, i.e., property predication of the theme object: The hearer of this construction inevitably come to the recognition that the property of the subject NP (the theme object) should be the focus of the predication, being chosen as responsible for the occurrence of the transitive event. It is also proposed that other semantic features of this construction, such as the implicit "general" agent and the "generic doability" of the process, can be ascribed to the primary feature of property predication.

This article finally inquires how the wide range of peripheral cases of the middle construction are motivated and thus should be located in the construction network of this form.